# 序

東大文学部考古学研究室研究紀要も，昭和57年以来，号を重ね，ここに第4号を刊行する運びとなった。

今回もまた，研究室諸氏の多くの研究成果を収めることができたことを喜ぶとともに，研究室一同の協力に心から感謝したい。

本年も学内遺跡の発掘が続き，遺跡調査室は設けられても，本研究室は多忙を極めてきた。しかしそれにもかかわらず，一同結束してその困難を克服し，研究に励んで，今日この第4号を滞りなく出すことができたのである。ことに学内発掘に参加した人々は，この一年間，冬は寒風の中，夏は炎熱酷暑の下，作業を続けながら，この論文を完成させたことを特に記しておきたい。

ところでこの本郷構内における一連の発掘調査によって，われわれは多くの新しい知見を得ることができた。その成果はいずれ正式に報告されるが，石垣，道路，地下式坑などの遺構や，瓦，陶磁器片などの遺物が多数発掘された。中には性格のよく分からない遺構もあった。ことに地下式坑または窖などと呼ばれている遺構は，従来も発掘されてはいたが，その数はあまり多くなかった。それが本郷構内において，多数密集した状態で発掘されたことは，極めて注目すべきことである。今後の研究が大いに期待されるところである。

このようにわれわれの行なってきた一連の発掘調査が，近世考古学の大きな発展を促す画期的なものとなることは疑いのないことである。

近世考古学は，現在成立しつつある考古学の新しい分野である。当然のことながら，それを専門として育ってきた考古学者は一人もいない。

われわれもまた，それぞれの分野をもちながら，衆知を集めてこの発掘に取り組んできたのである。やがてこの成果は，各人の研究にフィード・バックすることであろう。ここに，この発掘のもつ意義の一つがある。

今後も，われわれ一同，困難にめげることなく，切磋琢磨しながら研究に励んでいきたい。

なお最後になったが，本紀要の英文要約の校訂に当たって金子エリカ氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった安斎正人助手，原稿を整理した山科恵子氏の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上　野　佳　也